歴史の振り返り

高木 正之助(創業者)

来歴・エピソード

- 千葉県北東部にて誕生、生家は農家を営んでいた。
- 若かりし頃の正之助は「木村組」にて、重量鳶として大型機械の搬出入に携わっていた。
- 「木村組」では、職人たちを束ねる中心的存在であり、現代でいうところの”職長”として、建設現場を渡り歩いていた。
- 後に高木工業を受け継ぐ清水利雄は、正之助の重量鳶としての腕前を「天才的で名人技」と称するほどに卓越していた。
- 東洋運送㈱(現 東洋メビウス㈱)にも出入りをしており、先方の社史でも機械据付運搬を行っていたとの記述がある。
- 東洋製罐㈱では製缶の際に発生するブリキ屑を回収・運搬する業務を行っており、これが当社における業務請負の先駆けとなった。
- 1960年 肺がんのため逝去 享年59歳



▲高木正之助、勝子夫妻



▲東洋製罐㈱東京工場の様子



人物像

- 物静かな人物で、家庭でも自身の子どもに怒ったことがなかったほど。
- 仕事においても、まず自身がやって見せて、それを弟子に真似をさせ、身体に覚え込ませるといった方法で指導をしていた。

清水 利雄（元名誉会長）

来歴・エピソード

- 正之助の一番弟子として、創業期の「高木組」の頃より師事し、様々な現場で職人として活躍。
- 正之助の死後は事業を引き継ぎ、「高木組」を切り盛りしていた。
- 東洋運送㈱（現 東洋メビウス㈱）の田口社長からの助言で、個人事業だった「高木組」を法人である「㈲高木組」へ改組した。
- ㈱日本重量では橋梁工事や機械据付工事などで、日本の様々な場所へ出向き、工事の陣頭指揮を執っていた。
- テニス事業では、現在上席顧問を務める中嶋康博と共に事業を積極的に推進し、今日のVIP・TOPの基礎を築いた。
- とにかく「まずはやってみる」を実践した人で、ダーツ事業やドイツ製鞄の販売など、多数の事業に果敢に挑戦した。
- 2010年 逝去 享年85歳



▲高木組を継いだ頃の清水利雄



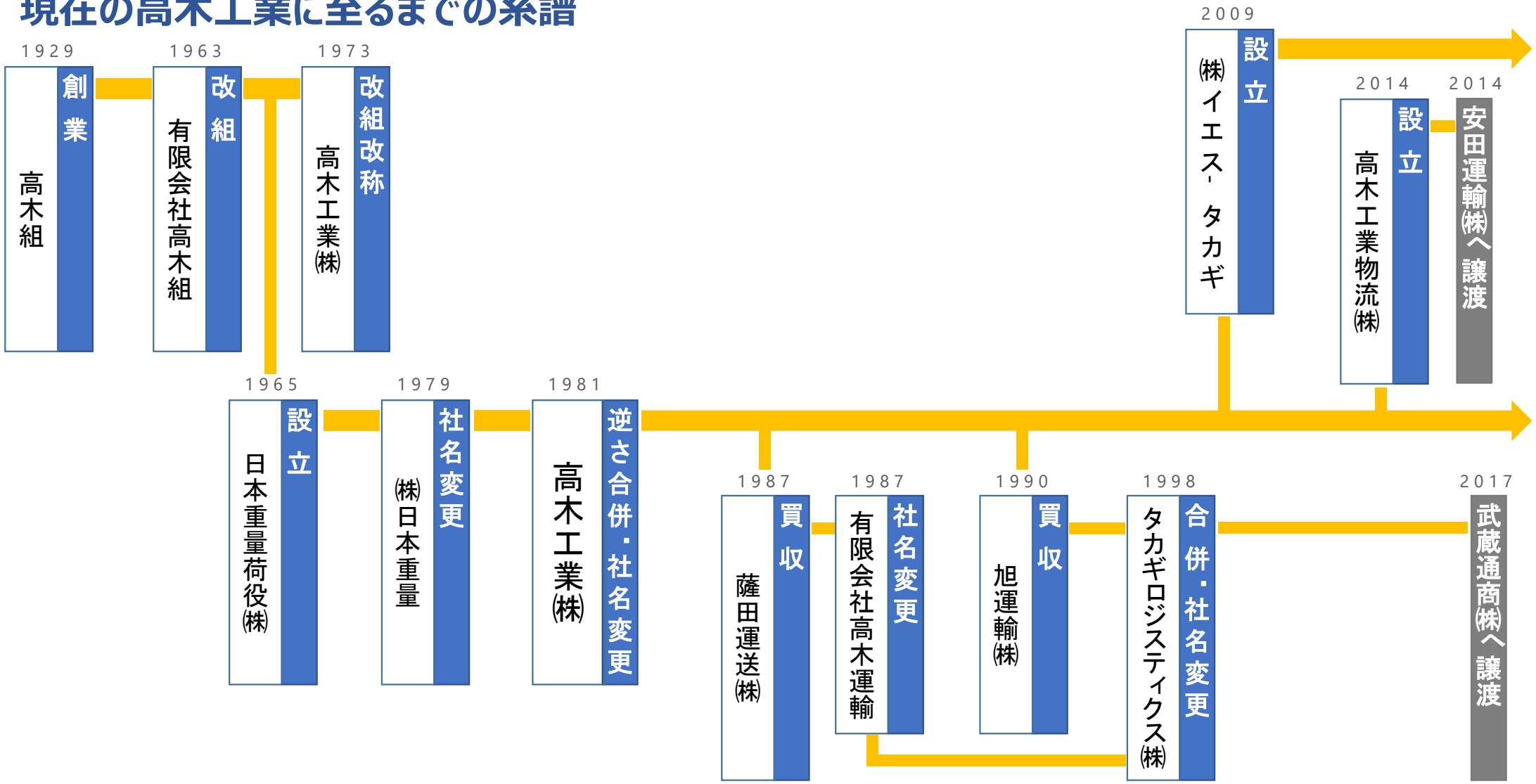
▲ダーツの視察



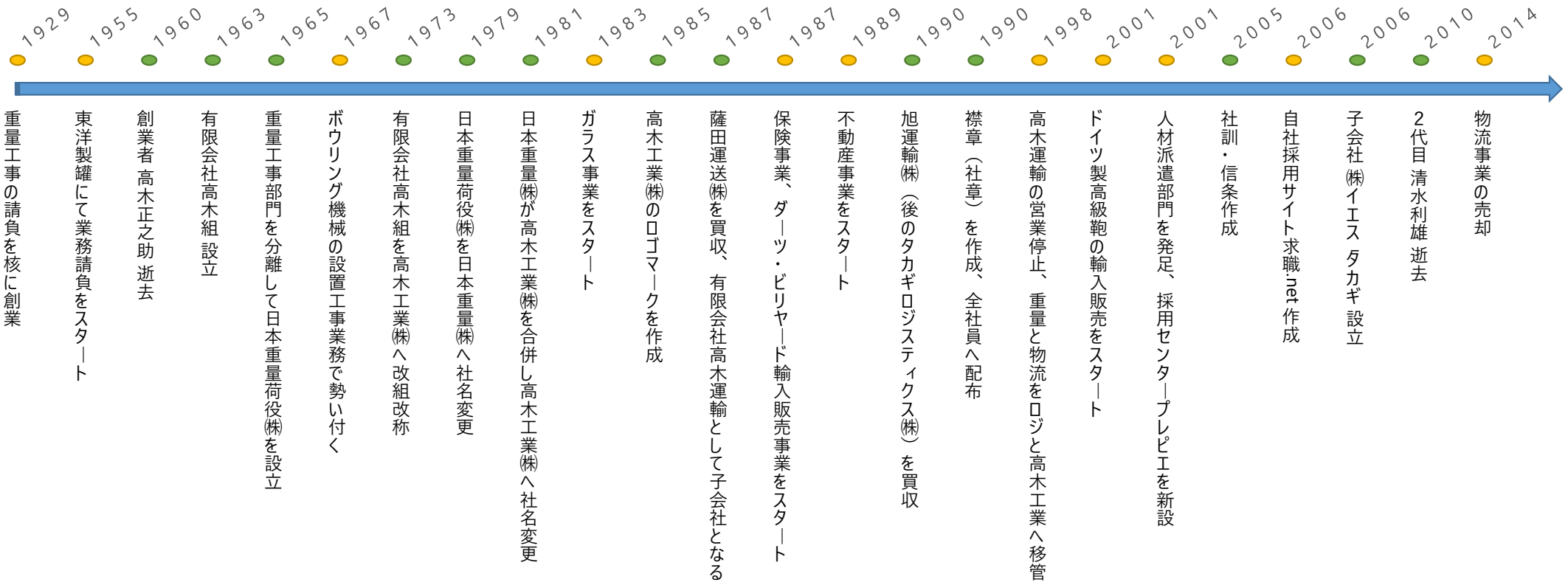
人物像

- 非常に行動力に富んだ人物で、社員に対しても、とにかく外へ出て物事を見てくるよう促していた。
- とにかく気配りが上手く、相手を自分のファンにしてしまうような、惹きつける力を持っていた。

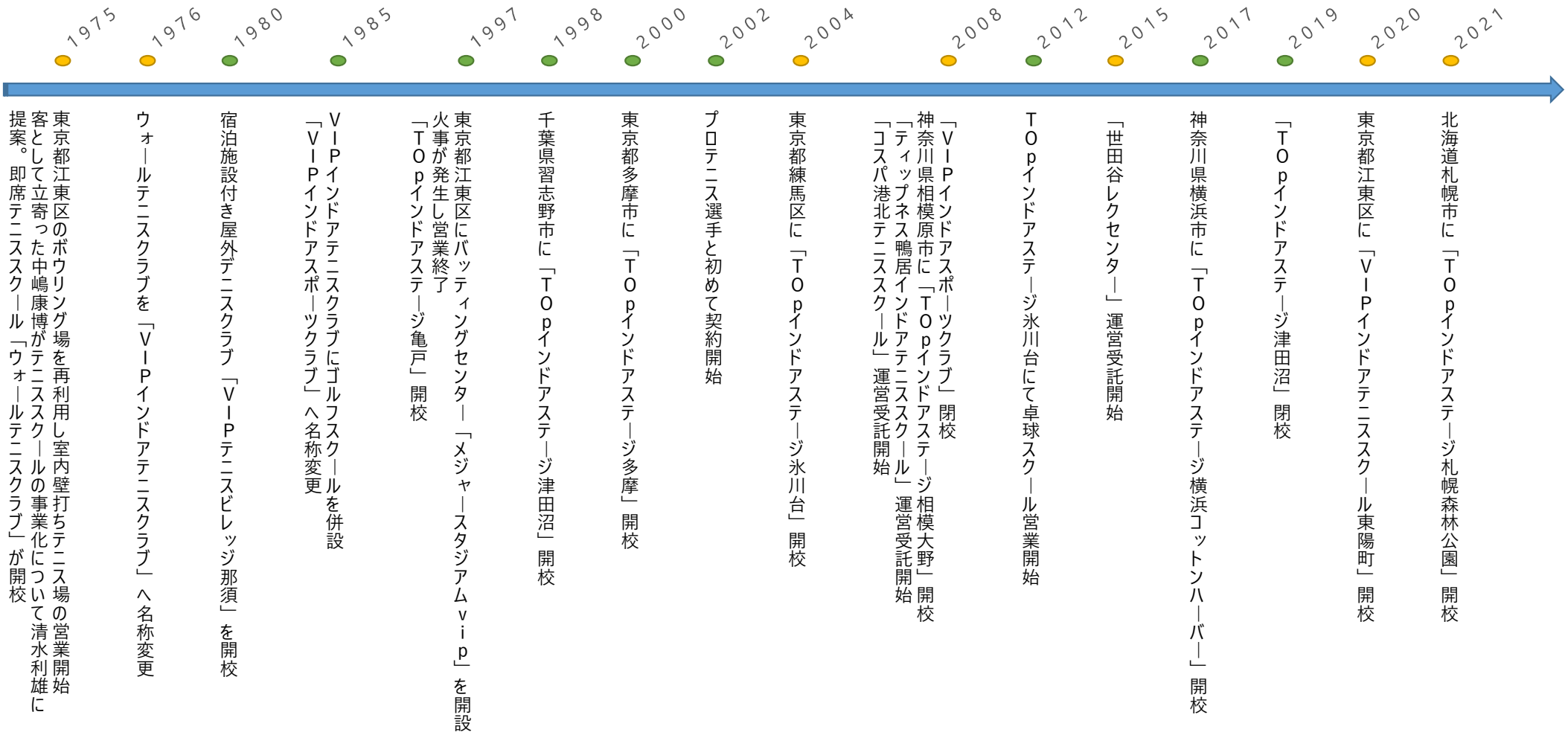
現在の高木工業に至るまでの系譜



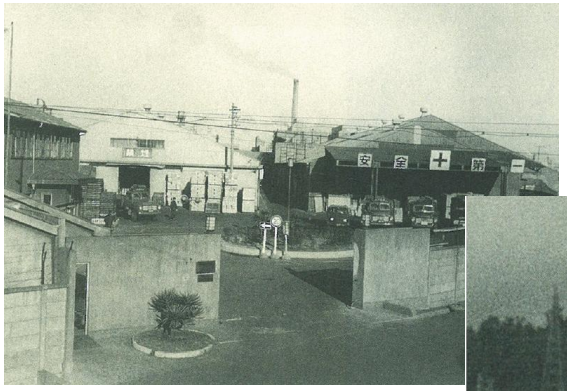
高木工業の創業と業務請負・人材派遣事業のあゆみ



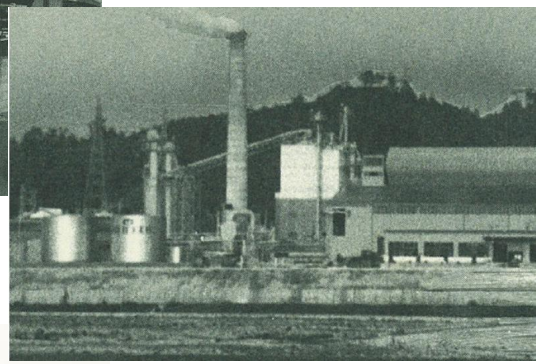
スポーツ事業本部のあゆみ



人材サービス事業のはじまり



・東洋ガラス株式会社 川崎工場の
旧正門
[『東洋ガラス100年の歩み』より]



・東洋ガラス株式会社 滋賀工場
1号窯稼働開始
[『東洋ガラス100年の歩み』より]



・京都駅からの大型送迎バス



・現在の株式会社ロッテ
狭山工場



・豊田鉄工株式会社 本社工場
[『創意熱く 豊田鉄工50年史』より]



・九州事業部 社員旅行の様子

スポーツ事業のはじまり



・入社当時の中嶋康博



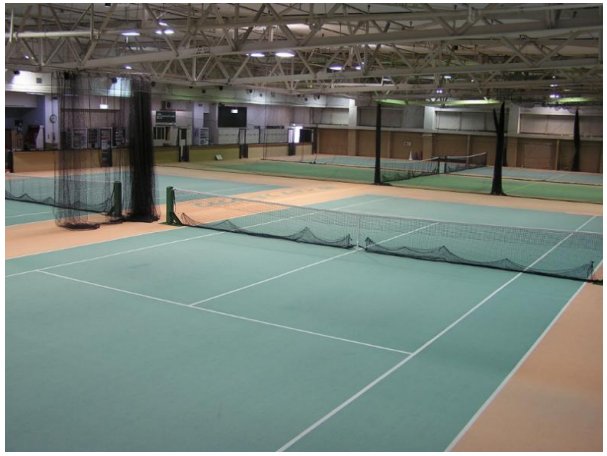
・第4期ウォールテニスクラブ
電車広告



・VIPインドアテニスクラブ
2階コート



・VIPインドアスポーツクラブ
（錦糸町）外観



・VIPインドアスポーツクラブ
（錦糸町）内観

物流事業関連



・東洋運送株式会社の下請会社として運送業務に携わり、1987年薩田運送有限会社を買収。
有限会社高木運輸の発足。



・1998年（平成10年）に新設された高木工業株式会社物流事業のトラック



・1988年の運輸部門



・□□□□□□□□□□□□□□□□

リーマンショック前の高木工業の様子



- 国内外問わず社員旅行も盛大に開催されていた。
- 当時はパスポートを作る費用も会社負担としていたらしい。



- 高木会長が副社長時代の写真。
- 社内で飲み会等が行われていた。



- 五反田高木ビルで働く様子。
- 女性社員には制服があった。



- 3代目社長の千野敬二氏。
- 会社としての諸規程、組織、制度の整備を行い、組織的経営の礎を築いた。
- 現在の管理職階層「部長」「グループ長」、「事業部長」「営業所長」の役職名を定着させた。

旧グループ会社

株式会社日本重量

1965年　㈲高木組の重量工事部門を分社化したことにより誕生
1981年　高木工業㈱を逆さ合併し、社名変更

㈱日本重量は1965年に㈲高木組から重量工事部門を分社化した会社で、当初は日本重量荷役㈱という社名で誕生した。

それまで主体としていた機械据付工事が受注が安定しなかったことから橋梁工事へ進出し、繁閑の差を埋め、安定した部門を抱えることで経営基盤の強化を図った。

1968年からは当時の日本でブームになり始めていた、ボウリング用機器の据付工事が始まり、最盛期には売上高のおよそ9割を占めていた。その後、景気が急速に冷え込むとボウリングブームも落ち込んだが、機器の解体・撤去工事により、関連工事の受注自体は1975年頃まで続いていた。

1970年代末になると解体工事も無くなり、業績が厳しくなってきており、メイン銀行のアドバイスを受けて、㈲高木組から改組した高木工業㈱を逆さ合併したのち、社名を高木工業㈱へ変更し、今の高木工業㈱が生まれた。



タカギロジスティクス株式会社

1998年　旭運輸㈱と㈲高木運輸の合併により誕生
2017年　武蔵通商㈱へ株式譲渡、高木グループを離れる

タカギロジスティクス㈱は旭運輸㈱と㈲高木運輸が合併したことにより誕生した。

1998年に運輸事業の全面的な見直しと改革が行われ、㈲高木運輸は赤字会社だったことにより、株式会社へ改組できなかったため、業務をすべて旭運輸㈱へ移管し、その後、旭運輸㈱をタカギロジスティクス㈱へ社名変更した。

高木工業㈱にて行っていた重量工事や物流部門の業務の一部を引き継ぎ分離独立し、大手小売業の運送・物流業務を請け負いながら、独立経営へと踏み出した。

機械メンテナンス事業や太陽光発電システム事業などにも進出し、売上利益ともに拡大をしていたが、当時の社長の退任により後継者問題が発生した。外部人材の活用や、高木工業への吸収など、様々な案が浮上したが、最終的に同業である武蔵通商㈱への売却が決定した。

